

面談の際に「塾では国語をどう教えているのでしょうか。家では指導しにくくて。」という質問に近年よく出会います。そこで、参考までに幾回かの指導を書いてみます。

著作権の関係で、本文及び問題文については引用の範囲を越えて使用することはできません。ご面倒でも、四谷大塚刊行予習シリーズの該当テキストをご覧の上、お読みください。

5年上巻 第16回 「物語・小説(5)」 基本問題 P182

今回の授業では、本文を全て一旦生徒たちに交代で音読させてから、文章読解問題の学習へと進めました。(2014. 6. 17と20の授業から)

通常物語文では、登場人物の関係の確認。あらすじの確認の後に、問いへと進めます。この基本問題は、その点複雑ではないので、省略して問いへと進みました。

物語文では、時代背景の説明が必要な場合があります。この程度の内容ならば戦争中とすぐ分かるのでしていません。5年下社会科で歴史を学ぶとずいぶん助かります。

問一 1 正解率が高い。間違えるとすれば(実際に数人いた)30行目から。「何を根拠に26行目からかな？」S君「場面が変わったから。」生徒一同啞然。当然「時間の経過。場所の移動。」というのを期待していた私の問い。

問三 1 指示語の問題で基本的なもの。傍線部の『『そのこと』にむしろほっとした』とあるけれど、どんなことにほっとしたの？ 棒線の直前をまず読んでご覧。「…まだそれらしい人の姿は見られなかった。」とあるから「…姿を見られなかったから。…見なかったから。…見かけなかったから。」となるね。では、次に『それらしい人の姿』とあるけれど、どんな人の姿？ さらに前の部分を読むように促す。

16行目から改段されて棒線②まで三行しかないので、すぐに「陸軍病院の傷病兵」と「面会に来た家族らしい人たち」わかる。

では、書いてご覧35字以内。生徒たちが書き始める。持ってきた生徒の答えを読んで、○をつけたり、直させる。

初めの記述の終わりの部分を忘れる、あるいは今見ている部分にしか目が行かない生徒は、「…ベンチに腰かけているところを見かけなかったから。」と書いてくる。

これはテストの際は、△であろうか。しかし、授業の中では事前に説明していることもあって×。

何がポイントかということ、結局指示語の問題で初めに答えに当たる部分にまた指示語が出てくる問題。結構ある書き方のパターンです。

問三 2 記号選択。「ほっとした」原因を問うもの。棒線の後の「…安堵だった。」の安堵の意味も一緒に、質問してみる。ちなみに、「安堵」はわりと(入試問題やテキストの文章で)見かける言葉です。六年生だと多くは、(すでに教えているし)意味を知っているし、「&」かと思った、と受けを狙う生徒もいます。

横道にそれますが、六年生との語彙力の差は大きなものがあるので、言葉遊び(だじゃれ、地口など)の能力(?)の違いにも驚かされます。

問四 問三と関連性の深い問題。今一緒に行動している三人の将校への配慮・気遣い・思いやり、など心情が理解できれば、平易な問い。

授業中は、まずA君に答えるように指名しましたが、数秒たったのでじゃB君とすると、「う～ん」と選択肢を慌てて読み始めました。そうです。他の子があたると自分では無関係のごとくに、思考停止・読もうとすらしらないのです。それが様子で、わかっているのに指名したのですね。こういう授業態度4年生では多いのですが、残念ながら5年生でも少数ですがいます。

問五 これも問四・問三同様の主人公の心情が理解できているかの問いで問い同士の関係が深い。

答え方の指示通りに書けるかどうかキー。

主人公ひさしの三人の将校への気持ちの変化。初めのは本文中38行目に「迷惑だなあ、という思いはいつのままにか消えていた。」あるので、すぐ「迷惑だと思っていた」と答えが返ってきますが、変化した後は具体的に書かれていないことに気づくにはやや時間がかかります。それでも、書いていないから自分で考えるのだと気づく子と気づかずにいつまでも探していて「わかりません」と返答する子に分かれます。「迷惑でなくなった」と答える子もいます(爆) 授業中はもちろん「迷惑だと思わなくなった」と答えた生徒を笑ったりしません。確かに、それはその通りなのですから。

三人の軍人への問三・問四にあるような心配り、気遣い、へと変化したことを指摘する。

迷惑だと思ったままならば、何も考えない。あるいは、意地悪く思うかもしれない。

いきなり、問五で心情の変化後答えさせるのではなく、問三と問四は、この問題のための伏線の働きをしてると考えられます。作問者がそこまで、考えているのだろうということです。もちろん生徒には、関係性を指摘してそこから、思うようになってどう感じているの? という質問でとどめますが。さらには、本文43行目からの手紙についても触れていきます。61行目の「…自分がこれまで知らなかった新たな感情の世界に、いま、確かに一步入った…」の部分が特に重要なヒントですね。

いざ書かせますと、前述のように指示通りに書けない、書かない、「迷惑」を忘れるなどが出てきます。一時記憶の限界時間を過ぎたのです。そこで、問いをもう一度見ると言った確認作業をするのが習慣になっているか否かが、重要です。

記述の問題などで、板書するときは「何字以内だっけ?」「最後は何で終わらせるんだっけ」と生徒たちに質問して、問いを確認する習慣をつけさせようとしています。何も、見ない生徒は後者の質問に「…から」「…こと」と確かめもせずに、答えたりします。同様に書いて持ってこさせる場合も、なんでもかでも「…から。」と書いたりします。

問八 「この文章全体で描かれている中心的なことの説明として…」主題(テーマ)を当問題。これも、問五が鍵となる問題だと肌で感じられれば、「三人に対する」ひさしの気持ちの違い(変化)だと想像がつく。授業では、想像がつかない生徒のために解答後に説明しています。